

フォト・エッセイスト

竹内 章夫氏

ルート66の旅



KANSAS

ディズニー&ピクサー映画『Cars』(2006年)のキャラクターモデルとなった1951年式インターナショナル社製のレッカー車(右)。



ILLINOIS

ルート66の旅はシカゴから始まる。ミレニアム・パークにある幅66フィート(約20メートル)の「クラウド・ゲート」(雲の門)を訪れる人たちは、ステンレス製の彫像に映る自分の姿を探して楽しんでいる。



MISSOURI

リボンを伸ばしたような起伏が続く。はるか向こうの坂の上に見えた点は、しばらくするとお互いに見えなくなり、やがて少し大きくなってまた見えてくる。そんなシーソーを繰り返しながら、数分後には猛烈なスピードでクルマがすれ違う。



TEXAS

大地に突き刺さった10台のキャデラック。誰もが自由にメッセージが描けるように一般開放されている。撮影当時は乳がん予防キャンペーンで、ピンクに彩られていた。



OKLAHOMA

タルサからルート66を少し離れたサリソウの夕焼け雲。ジョン・スタインベックの小説『怒りの葡萄』(1939年)では、耕作地を奪われた主人公一家が古いセダンに家財道具を詰め込み新天地カリフォルニアを目指し、ルート66を西へと向かう苦難の旅がここから始まる。



若いころ毎週テレビドラマ『ルート66』の放送日がやってくるのを楽しみにしていました。白黒画面に映し出されるアメリカは輝きに満ちあふれ、コルベットでルート66を旅する主人公に憧れたものでした。その記憶は30年後、ルート66紀行誌との出会いによって鮮明によみがえり、気づけば地図を片手に搭乗ゲートをくぐっていました。

ルート66はシカゴとサンタモニカを結ぶ大陸横断道路で、アメリカの古き良き時代の面影がありました。果てしなく広がる平原と青空は、心の視界を広げてくれます。その一方で目にしたのは、閉鎖された道路、廃業したモーテルやガスステーション、廃屋のレストランでした。

ルート66は全米を網羅するインターステート・ハイウェイ(州間高速道路)の出現で、1984年には公式地図からその名が消えました。「まだある道なのか」「どこからどこまでなのか」「実際に行けるのか」——アメリカ国内でさえも、その存在を詳しく知る人は少なくなっていました。インターステートに上書きされた区域や分断・閉鎖された箇所はあるものの、今でも名称を州道や郡道に変えて大部分は残っています。

沿道の人々はルート66をこよなく愛し、訪れる人と共有する喜びと誇りを持っています。写真は絵や音楽と同じように、言葉が通じなくてもわかり合えるものがあります。ルート66の旅で得た素晴らしい人々との出会いは、私の人生の宝物となりました。

一つ進めば新しい魅力がまた一つ現れる。私の旅はまだ続きます。(談)

● たけうち、あきお

1942年兵庫県生まれ。94年にルート66を旅して以来、20回にわたり車で延べ489日12万9150キロを走破。2004年インターナショナル・ルート66フェスティバルで現地メディアの注目を集めた。写真集に『ルート66不朽のハイウェイ』(風詠社)、『ルート66帰郷』(新風舎)など。



NEW MEXICO

インターステート・ハイウェイ開通後、モーテルが次々と閉鎖されていくなか、ブルースワロー・モーテルは古きよき伝統を守り続けている。



ARIZONA

映画『Cars』の舞台は、山岳地帯のクール・スプリングスにボツンと佇むガスステーションを一つのまちとしてイメージを広げたのかもしれない。



CALIFORNIA

太平洋の潮風が心地よい黄昏のサンタモニカ桟橋。公式上の終着点ではないが、ルート66の旅を終えるには最適だ。

